

北海道の木が茂る里山で  
設計士家族の家造り



2 011年に東京から鷹栖へと移住した藤森さん一家。仮の家を建てる土地を探した。見つけたのは木が生い茂る里山の傾斜地。仁之さんはすぐ法務局で調べて所有者の鷹栖町森林組合に直談判した。だが最初は門前払い。東京から来たがこの馬の骨ともわからない仁之さんが、林地を購入するのは簡単な話ではなかった。諦めずに仁之さんは次の手段へ。近くにある森のようちえんぴっぱら(100ページ参照)の松下理香子さんも、同じ土地を買っていたことがわかったからだ。理香子さんの夫、久志さんと共に再度森林組合を訪問。真摯な姿勢と明確な利用方針によって信頼を得て、2〜3ヵ月後には土地を購入することができた。しかし整備されていない林地は手強く、毎日笹を刈り、木を伐り倒して、家を建てられる状態になるまでに2年の月日がかかった。仁之さんは勉強家で「山主塾」に通ってチェーンソーの使い方から森の手入れまでを学んだりもした。業者の手はなるべく借りず、自身が描く景色をつくり上げていったのだ。

さて、本題の家造りである。設計

士としてのキャリアがある仁之さんだから、きつとスムーズに進んだものと思っていたが、大苦戦。家族3人が叶えたい家話し合い設計したが、「本当に建てるんですか?」と建築業者に言われるほど大がかりなものに。想定に近い見積もりを見て途方に暮れたそう。「今までのどのクライアントよりも家族の要望や駄目出しが厳しかったですね」と仁之さん。今の造りになるまで何度も家族会議を開き、設計し直したという。また「なるべく地球に負担をかけたくない」と断熱材や気密材の勉強もした。北海道は土地が安い分、設備や材料にお金がかかることがある。窓ガラスやコンクリートの価格が東京の2〜3倍高かったのだ。費用を節約するために壁の珪藻土の塗装を夫婦2人で行うなどして工夫した。完成したのは2015年10月末、移住から4年近くが経過していた。

藤森さんの例から学んだのは、プロであっても北海道の気候、環境に苦戦するということ。家を建てるということとは、移住することと同じかそれ以上の大きな決断だ。時間をかけて家族全員で考え抜いた家。愛着は人一倍強いものがあるだろう。